

伸び支度

島崎藤村

青空文庫

十四、五になる大概たいがいの家の娘いへむすめがそうであるように、袖子そでこもその年頃としごろになつてみたら、人形にんぎようのことなぞは次第しだいに忘れわすれたようになつた。

人形にんぎように着きせる着物きものだ襦袢じゆばんだと言いつて大騒おおさわぎした頃ころの袖子そでこは、いくつそのために小ちいさな着物きものを造つくり、いくつ小ちいさな頭巾ずきんなぞを造つくつて、それを幼おきない日ひの樂たのしみとしてきたか知しれない。町まちの玩具屋おもちゃやから安物やすものを買かつて来てすぐきに首くびのとれたもの、顔かおが汚よごれ鼻はなが欠かけするうちにオバケのようきみわるに氣味悪きみわるくなつて捨すててしまつたもの——袖子そでこの古ふるい人形にんぎようにもいろいろあつた。その中なかでも、父とうさんに連つれられて震災前しんさいまえの丸善まるぜんへ行いつた時ときに買かつて貰もら

つて来た人形は、一番長くあつた。あれは独逸の方から新
荷が着いたばかりだという種々な玩具と一緒に、あの丸
善の二階に並べてあつたもので、異国の子供の風俗ながらに愛
らしく、格安で、しかも丈夫に出来ていた。茶色な髪をか
ぶつたような男の児の人形で、それを寝かせれば眼をつぶり、
起こせばぱつちりと可愛い眼を見開いた。袖子があの人形に
話しかけるのは、生きている子供に話しかけるとほとんど変わ
りがないくらいであつた。それほどに好きで、抱き、擁え、撫で、
持ち歩き、毎日のように着物を着せ直しなどして、あの人
形のためには小さな蒲団や小さな枕までも造つた。袖子が風邪
でも引いて学校を休むような日には、彼女の枕もとに足を投

げ出し、いつでも笑ったような顔をしながらお伽話の相手に
なっていたのも、あの人形だった。

「袖子さん、お遊びなさいな。」

と言つて、一頃はよく彼女のところへ遊びに通つて来た近

所の小娘もある。光子さんといつて、幼稚園へでもあがる

うという年頃の小娘のように、額のところへ髪を切りさげて

いる児だ。袖子の方でもよくその光子さんを見に行つて、暇さえ

あれば一緒に折り紙を畳んだり、お手玉をついたりして遊んだ

ものだ。そういう時の二人の相手は、いつでもあの人形だつ

た。そんなに抱愛の的であつたものが、次第に袖子から忘れら

れたようになっていった。そればかりでなく、袖子が人形の

ことなぞを以前の^{いぜん}のように大騒^{おおさわ}ぎしなくなつた頃^{ころ}には、光子^{みつこ}さんともそう遊^{あそ}ばなくなつた。

しかし、袖子^{そでこ}はまだ漸^{ようや}く高等^{こうとう}小学^{しょうがく}の一学^{がく}年^{ねん}を終^おわるか終^おわらないぐらいの年^{とし}頃^{ごろ}であつた。彼女^{かのじよ}とても何^{なに}かなしにはいられなかつた。子供^{こども}の好^すきな袖子^{そでこ}は、いつの間^まにか近^{きん}所^{じよ}の家^{いえ}から別^{べつ}の子供^{こども}を抱^だいて来^きて、自分^{じぶん}の部屋^{へや}で遊^{あそ}ばせるようになった。数^{かず}え歳^{どし}の二^{ふた}つにしかならない男^{おとこ}の児^こであるが、あ^{なん}のきかない氣^きの光子^{みつこ}さん^{くら}に比^{くら}べたら、これはまた何^{なん}というおとなしいものだろう。金^{きん}之助^{のすけ}さん^{なまえ}という名^な前^{まえ}からして男^{おとこ}の子^こらしく、下^{しも}ぶくれのしたその顔^{かお}に笑^えみの浮^うかぶ時^{とき}は、小^{ちい}さな靨^{えくぼ}があらわれて、愛^{あい}らしかつた。それに、この子^この好^よいことには、袖子^{そでこ}の言^いうなりになつた。

どうしてあの少しもじつとしていないで、どうかすると袖子の手すこにおえないことが多おおかつた光子みつこさんを遊あそばせるとは大違おおちがいだ。
 袖子そでこは人形にんぎようを抱だくように金之助きんのすけさんを抱だいて、どこへでも
 好きすなところへ連つれて行くことが出来た。自分じぶんの側そばに置いて遊あそば
 せたければ、それも出来た。

この金之助きんのすけさんは正月しょうがつ生まれの二つでも、まだいくらか人ひと
 の言葉ことばを知らしない。蕾つぼみのようなその脣くちびるからは「うまうま」ぐらい
 しか泄もれて来こない。母親ははおや以外の親いしいものを呼よぶにも、「ちや
 あちやん」としかまだ言いい得えなかつた。こんな幼おさない子供こどもが袖子そでこの
 家いえへ連つれられて来きてみると、袖子そでこの父とうさんがいる、二人ある兄にいさ
 ん達たちもいる、しかし金之助きんのすけさんはそういう人達ひとたちまでも「ちや

「あちゃん」と言いつて呼よぶわけではなかつた。やはりこの幼おい子さな供こどもの呼よびかことばける言ことば葉したは親かぎしいものに限きられていた。もともと金きん之のす助けさんを袖そで子この家いえへ、初はじめて抱だいて来きて見みせたのは下女げじよのお初はつで、お初はつの子煩悩こぼんのうときたら、袖そで子こに劣おとらなかつた。

「ちやあちゃん。」

それが茶ちやの間まへ袖そで子こを探さがしに行く時ゆのとき子こ供どものこえ声こゑだ。

「ちやあちゃん。」

それがまた台だい所どころで働はたらいていはつるお初さがを探ときす時こどもの子こゑ供こゑのこゑ声こゑでも

あるのだ。金きん之のすけ助けさんは、まだよちよちしたおぼつかない足あしも

許とで、茶ちやの間まと台だい所どころのあいだ間まを往いつたり来きたりして、袖そで子こやお

初はつの肩かたにつかまったり、二人ふたりの裾すそにまといついたりして戯たわむれた。

三月がつの雪ゆきが綿わたのように町まちへ来て、一ひと晩ばんのうちに見事みごとに溶とけて
 ゆく頃ころには、袖そで子この家いえではもう光子みつこさんを呼よぶ声こえが起おこらなかつ
 た。それが「金きん之助のすけさん、金きん之助のすけさん」にかわつた。

「袖そで子こさん、どうしてお遊あそびにならないんですか。わたしを忘わすれになつたんですか。」

近所きんじよの家いえの二階かいの窓まどから、光子みつこさんの声こえが聞きこえていた。そ
 のませた、小娘こむすめらしい声こえは、春先はるさきの町まちの空くう氣きに高たかく響ひびけて聞き
 こえていた。ちようど袖そで子こはある高等女学校こうとうじよがっこうへの受験じゅけんの準じ
 備ゆんぴにいそがしい頃ころで、遅おそくなつて今いままでの学がっ校こうから帰かえつて来き
 た時ときに、その光子みつこさんの声こえを聞きいた。彼女かのじよは別べつに悪わるい顔かおもせず、
 ただそれを聞きき流ながしたままで家いえへ戻もどつてみると、茶ちやの間まの障しょう子じ

のわきにはお初^{はつ}が針仕事しながら金之助^{きんのすけ}さんを遊ばせていた。どうしたはずみからか、その日^ひ、袖子^{そでこ}は金之助^{きんのすけ}さんを怒^{おこ}らしてしまった。子供^{こども}は袖子^{そでこ}の方^{ほう}へ来^こないで、お初^{はつ}の方^{ほう}へばかり行^いつた。

「ちやあちやん。」

「はあい——金之助^{きんのすけ}さん。」

お初^{はつ}と子供^{こども}は、袖子^{そでこ}の前^{まえ}で、こんな言葉^{ことば}をかわしていた。子供^{こども}から呼^よびかけられるたびに、お初^{はつ}は「まあ、可愛^{かわい}い」という様子^{ようす}をして、同じ^{おな}ことを何度^{なんど}も何度^{なんど}も繰^くり返^{かえ}した。

「ちやあちやん。」

「はあい——金之助^{きんのすけ}さん。」

「ちやあちゃん。」

「はあい——金之助さん。」

あまりお初の声が高かつたので、そこへ袖子の父さんが笑顔を見せた。

「えらい騒ぎだなあ。俺は自分の部屋で聞いていたが、まるで、お前達のは掛け合いじゃないか。」

「旦那さん。」とお初は自分でもおかしいように笑って、やがて袖子と金之助さんの顔を見くらべながら、「こんなに金之助さんは私にばかりついてしまつて……袖子さんと金之助さんは、今日は喧嘩です。」

この「喧嘩」が父さんを笑わせた。

袖そで子は手て持ち無沙汰で、お初はつの側そばを離はなれないでいる子供こどもの顔かおを
 見みまもつた。女おんなにもしてみたいほどの色いろの白しろい児こで、優やさしい眉まゆ、
 すこし開ひらいた脣くちびる、短みじかいうぶ毛げのままの髪かみ、子供こどもらしいおでこ――
 すべて愛あいらしかった。何なんとなく袖そで子にむかつてすねているような
 無邪むじゃ気きさは、一いつ層そうその子供こどもらしい様子ようすを愛あいらしく見みせた。こん
 ないじらしさは、ああの生せい命めいのなない人にん形ぎにはなかつたものだ。
 「何なんと言いつても、金きん之の助すけさんは袖そでちゃんのお人にん形ぎさんだね
 。

と言いつて父とうさんは笑わらつた。

そういそでう袖こ子の父とうさんは鰥やもめで、中ちゅう年ねんで連つれ合あいに死しに別わかれ
 た人ひとにあるように、男おとこの手て一つでどうにかこうにか袖そで子たちを大おお

きくしてきた。この父^{とう}さんは、金^{きん}之助^{のすけ}さんを人^{にんぎよう}形^{あつ}扱^かいに
 する袖^{そで}子^このことを笑^{わら}えなかつた。なぜかなら、そういう袖^{そで}子^こが、
 実^{じつ}は父^{とう}さんの人^{にんぎよう}形^{むすめ}娘^めであつたからで。父^{とう}さんは、袖^{そで}子^このた
 めに人^{にんぎよう}形^めまでも自分^{じぶん}で見^み立て、同^{おな}じ丸^{まる}善^{ぜん}の二階^{かい}にあつた独^ど
 逸^{イツ}出^で来^きの人^{にんぎよう}形^{なか}の中^{なか}でも自分^{じぶん}の氣^きに入^いつたようなものを求^{もと}めて、
 それを袖^{そで}子^こにあてがつた。ちようど袖^{そで}子^こがあの人^{にんぎよう}形^めのため
 いくつかの小^{ちい}さな着^き物^{もの}を造^{つく}つて着^きせたように、父^{とう}さんはまた袖^{そで}子^こ
 のために自分^{じぶん}の好^{この}みによつたものを選^{えら}んで着^きせていた。
 「袖^{そで}子^こさんは可^{かわ}哀^{あい}そうです。今^{いま}のうちに紅^{あか}い派^は手^でなものでも着^きせ
 なかつたら、いつ着^きせる時^{とき}があるんです。」

こんなことを言^いつて袖^{そで}子^こを庇^か護^ばうようにする婦^ふ人^{じん}の客^{きやく}なぞがな

いでもなかったが、しかし父とうさんは聞き入れなかった。娘むすめの風俗なりはなるべく清楚せいそに。その自分じぶんの好みこのから父とうさんは割り出だして、袖そ子でこの着る物ものでも、持ち物ものでも、すべて自分じぶんで見立みだててやった。そして、いつまでも自分じぶんの人形にんぎょう娘むすめにしておきたかった。いつまでも子供こどもで、自分の言いうなりに、自由じゆうになるもののように……

ある朝あさ、お初はつは台所だいどころの流しもとに働はたらいていた。そこへ袖子そでこが来て立たった。袖子そでこは敷布しきふをかかえたまま物ものも言いわないで、蒼あおざめた顔かおをしていた。

「袖子そでこさん、どうしたの。」

最初さいしよのうちこそお初はつも不思議ふしぎそうにしていたが、袖子そでこから敷布しきふを受け取とってみて、すぐにその意味いみを読よんだ。お初はつは体格たいかくも

おお、ちからもある女であつたから、袖子の震えるからだへうしろから手をかけて、半分抱きかかえるように茶の間の方へ連れて行つた。その部屋の片隅に袖子を寝かした。

「そんなに心配しないでいいんですよ。私が好いようにしてあげるから——誰でもあることなんだから——今日は学校をお休みなさいね。」

とお初は袖子の枕もとで言つた。

祖母さんもなく、母さんもなく、誰も言つて聞かせるものがないような家庭で、生まれて初めて袖子の経験するようなことが、思いがけない時にやつて来た。めつたに学校を休んだことのない娘が、しかも受験前でいそがしがつてゐる時であつた。三月

らしい春はるの朝日あさひが茶ちゃの間の障子しょうじに射さしてくる頃ころには、父とうさんは袖そで子こを見みに來きた。その様よう子すをお初はつに問といたずねた。

「ええ、すこし……」

とお初はつは曖あい昧まいな返事へんじばかりした。

袖そで子こは物ものも言いわずに寝苦ねぐるしがつていた。そこへ父とうさんが心配しんぱい

して覗のぞきに來くる度たびに、しまいにはお初はつの方ほうでも隠かくしきれなかつた。

「旦那だんなさん、袖そで子こさんのは病氣びようきではありません。」

それを聞きくと、父とうさんは半信半疑はんしんはんぎのまま、娘むすめの側そばを離はなれた。

日頃母ひごろかあさんの役やくまで兼かねて着物きものの世話せわから何なにから一切いっさいを引ひき受う

けている父とうさんでも、その日ひばかりは全まったく父とうさんの畠はたけにないこと

であつた。男おとこ親おやの悲かなしさには、父とうさんはそれ以い上じょうのことを

お初はつに尋ねたずることも出来できなかつた。

「もう何時なんじだろう。」

と言いつて父とうさんが茶ちやの間に掛かかっている柱時計はしらどけいを見みに來た頃ころは、その時計とけいの針はりが十時じを指さしていた。

「お昼ひるには兄にいさん達たちも歸かえつて來るな。」と父とうさんは茶ちやの間のなかを見みまわして言いつた。「お初はつ、お前まえに頼たのんでおくがね、みんな学がっこ

校うから歸かえつて來て聞きいたら、そう言いつておくれ——きようは父とう

さんそでが袖そでちゃんを休やすませたからツて——もしかしたら、すこし頭あたま

が痛いたいからツて。」

父とうさんは袖そで子の兄にいさん達たちが学がっこ校うから歸かえつて來る場合ばあいを予想よそうし

て、娘むすめのためにいろいろ口実こうじつを考かんがえた。

ひる
 昼すこし前にはもう二人の兄さんが前後して威勢よく帰つて来
 た。一人の兄さんの方は袖子の寝ているのを見ると黙つていな
 った。

「オイ、どうしたんだい。」

その権幕に恐れて、袖子は泣き出したばかりになった。そ
 こへお初が飛んで来て、いろいろ言い訳をしたが、何も知らない
 兄さんは訳の分からないという顔付きで、しきりに袖子を責めた。
 「頭が痛いぐらいで学校を休むなんて、そんな奴があるかい。
 弱虫め。」

「まあ、そんなひどいことを言つて、」とお初は兄さんをなだめ
 るようにした。「袖子さんは私が休ませたんですよ——きようは

私が休ませたんですよ。」

不思議な沈黙が続いた。父さんでさえそれを説き明かすこと

が出来なかつた。ただただ父さんは黙つて、袖子の寝ている部屋

の外の廊下を往つたり来たりした。あだかも袖子の子供の日が最

早終わりを告げたかのように——いつまでもそう父さんの人

形娘ではいけないような、ある待ち受けた日が、とうとう父さ

んの眼の前へやつて来たかのように。

「お初、袖ちゃんのことはお前によく頼んだぜ。」

父さんはそれだけのことを言いくそうに言つて、また自分の

部屋の方へ戻つて行つた。こんな悩ましい、言うに言われぬ一日

を袖子は床の上に送つた。夕方には多勢のちいさな子供の声

にまじつて例の光子さんの甲高い声も家の外に響いたが、袖子はそれを寝ながら聞いていた。庭の若草の芽も一晩のうちに伸びるような暖かい春の宵ながらに悲しい思いは、ちょうどそのままのように袖子の小さな胸をなやましくした。

翌日から袖子はお初に教えられたとおりにして、例のように学校へ出掛けようとした。その年の三月に受け損なつたらまた一年待たねばならないような、大事な受験の準備が彼女を待つていた。その時、お初は自分になった時のことを言い出して、

「私は十七の時でしたよ。そんなに自分が遅かつたものですからね。もつと早くあなたに話してあげると好かつた。そのくせ私は

話はなそう話はなそうと思おもいながら、まだ袖そで子さんには早はやかろうと思おもつて、
 今いままで言いわずにあつたんですよ……つい、自じ分ぶんが遅おそかったもので
 すからね……学が校っこうの体たい操そうやなんかは、その間あいだ、休やすんだ方ほうがい
 いんですよ。」

こんな話を袖そで子にして聞きかせた。

不安ふあんやら、心しん配ぱいやら、思おもい出だしたばかりでもきまりのわるく、

顔かおの紅あかくなるような思おもいで、袖そで子は学が校っこうへの道みちを辿たどつた。この
 急きゆう激げきな変へん化か——それを知しつてしまえば、心しん配ぱいもなにもなく、

ありふれたことだといふこの変へん化かを、何なんの故ゆえであるのか、何なんの為ため
 であるのか、それを袖そで子は知しりたかつた。事じ実じつ上じょうの細こまかい注ちゆう
 意いを残のこりなくお初はつから教おしえられたにしても、こんな時ときに母かあさん

でも生きていて、その膝ひざに抱だかれたら、としきりに恋こいしく思おもつた。いつものように学が校っこうへ行いつてみると、袖そで子こはもう以い前ぜんの自じ分ぶんではなかつた。ことごとじゆうに自じゆう由うしなを失なつたようせまで、あたりが狭せまかつた。昨日きのうまでの遊あそびの友とも達だちからは遽にわかに遠とおのいて、多お勢おせの友とも達だちが先せん生せい達たちと縄なわ飛とびに鞠まり投なげに嬉き戲ぎするさうんどうまを運うんどう動じよう場ようの隅すみにさびしく眺ながめつくした。

それから一週しゆうかん間かんばかり後あとになつて、漸ようやく袖そで子こはあたりまえのからだに帰かえることが出で来きた。溢あふれて来くるものは、すきべて清きよい。あだかも春はるの雪ゆきに濡ぬれて反かえつて伸のびる力ちからを増ます若わか草くさのように、生し長とざかりの袖そで子こは一層いっそういいきいきとした健けん康こうを恢かい復ふくした。「まあ、よかつた。」

と言つて、あたりを見^{みまわ}した時の袖子は何^{なに}がなしに悲^{かな}しい思^{おも}ひに
 打^うたれた。その悲^{かな}しみは幼^{おきな}い日^ひに別^{わか}れを告^つげて行^ゆく悲^{かな}しみであつ
 た。彼女^{かのじよ}は最^も早^{はや}今^{いま}までのよう^めな眼^めでもつて、近^{きんじよ}所^{じよ}の子^こ供^{ども}達^{たち}
 を見^みることも出^で来^きなかつた。あ^あの光^{みつ}子^こさんなぞが黒^{くろ}いふさふさし
 た髪^{かみ}の毛^けを振^ふつて、さ^さも無^む邪^{じゃ}氣^きに、家^{いえ}のまわ^{まわ}りを駆^かけつてい^いる
 のを見^みると、袖^{そで}子は自^こ分^{ぶん}でも、も^もう一^{いち}度^ど何^{なに}も知^しら^らず^に眠^{ねむ}つてみた
 いと思^{おも}つた。

おとこおんな^{おとこおんな}な^そうい^いま^あき^き
 男^{おとこ}と女^{おんな}の相^{あい}違^{ちが}ひが、今^{いま}は明^あら^かに袖^{そで}子^こに見^みえ^てき^きた。さ^さも^のん^き
 そうな兄^{にい}さん達^{たち}とち^ちが^がつて、彼^{かの}女^{じよ}は自^じ分^{ぶん}を護^{まも}ら^らね^ばなら^なかつ
 た。大^{おと}人^{とな}の世^せ界^{かい}のこ^ことはす^すつ^つか^かり^わ分^わか^かつてしま^いつ^つた^たと^とは言^いえ^えな^い
 ま^までも、す^すく^くな^なくもそ^それを覗^{のぞ}いて見^みた。そ^この心^{こころ}から、袖^{そで}子^こは言^いい

あらわしがたい驚きをも誘われた。

袖子の母さんは、彼女が生まれると間もなく激しい産後の出

血で亡くなった人だ。その母さんが亡くなる時には、人のか

らだに差したり引いたりする潮が三枚も四枚もの母さんの単衣を

雫のようにした。それほど恐ろしい勢いで母さんから引いて行つ

た潮が——十五年の後になつて——あの母さんと生命の取りか

えつこをしたような人形娘に差して来た。空にある月が満

ちたり欠けたりする度に、それと呼吸を合わせるような、奇蹟

でない奇蹟は、まだ袖子にはよく呑みこめなかった。それが人の

言うように規則的に溢れて来ようとは、信じられもしなかった。

故もない不安はまだ続いていて、絶えず彼女を脅かした。袖子

は、その心配しんぱいから、子供こどもと大人おとなの二つの世界せかいの途中とちゅうの道端みちばたに息いきづき震ふるえていた。

子供こどもの好きすきなお初はつは相変あいわらず近所きんじよの家いえから金之助きんのすけさんを抱だいて来きた。頑是がんぜない子供こどもは、以前いぜんにもまさる可愛かわいげな表情ひようじようを見せて、袖子そでの肩かたにすがったり、その後あとを追おったりした。

「ちやあちやん。」

親したしげに呼よぶ金之助きんのすけさんの声こえに変わかわりはなかつた。しかし袖そで子でこはもう以前いぜんと同おなじようにはこの男おとこの児こを抱だけなかつた。

青空文庫情報

底本：「少年少女日本文学館 第三卷 ふるさと・野菊の墓」講談社

1987（昭和62）年1月14日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第10刷発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：柳沢成雄

1999年12月22日公開

2005年12月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伸び支度

島崎藤村

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>